



坂田和人 Kazuhito SAKATA
1955年生まれ。映像ジャーナリスト。
登山、キャンプなどのアウトドア分野の撮影を得意とし、文化論的な視点を交えたアウトドア読み物を執筆。アメリカではナバホ居留区で、ネイティブアメリカンの人たちと交わり生活をともにする。また南米アマゾン川流域で、原住民マチゲンガ族の集落に入り、住民と一緒に狩猟採集生活を体験。ネパール、カムチャッカ、環太平洋、アフリカなどを探索し、手つかずの自然を堪能し、異文化交流を果たす。代表的著書に「キャンプに連れて行く親は、子供を伸ばす!」(扶桑社)「キャンプに連れて行く親は、子供を伸ばす!」扶桑社 <http://www.fusosha.co.jp/book/2009/05986.php>

福島雅邦 Masakuni FUKUSHIMA
1956年生まれ。一般社団法人 日本RV協会会長。
1991年、キャンピングカービルダーとして日本で初の量産型軽キャンパーを製作。1998年には日本初の本格的クラスAキャンピングカー(フルコン)を開発し、日本のキャンピングカー産業に多大な功績を残す。一方ではキャンプを愛し、自然体験が「人間力」を高めることに人一倍高い関心を示し、自らそれを実行。テクノロジーとネイチャーの融合による新しいキャンピングカー文化の創出に尽力する。

| 特 | 別 | 対 | 談 |

キャンピングカー旅行は子供の感性を伸ばす

映像ジャーナリスト **坂田和人**さん **SPECIAL TALK** 日本RV協会会長 **福島雅邦**さん

幼い頃の自然体験が一生を支配する

【司会】 子供がキャンピングカー旅行やキャンプを楽しむことで、想像力が育まれたり、感性が鋭敏になるということを実感しているファミリーが増えています。アウトドア体験がなぜ子供の心を豊かにするのか。それについて、それぞれご自身の体験などを交えて語っていただきたいと思います。

【福島】 私は群馬県の農家の次男坊に生まれましたから、物心がついた頃から川原や山奥といった自然が「遊び場」でした。野原に生えている木にシートをくりつけて屋根や囲いをつくり、その中で寝泊まりしたり、川原で魚を手づかみにして焚き火で焼いて食べたり…。

そういう体験を繰り返して育ってきたので、「遊び」というものは、自然を加工して自分たちで創り上げるものだという意識を小さい頃

から身につけましたね。

また、集団で遊んでいましたから、子供たちの中でも年長者が小さな子の面倒をみるとか、危機回避の術を教えるとか、そういうことを当たり前のように思いながら遊んでいました。

【坂田】 僕の場合は、父親の影響が大きかったです。オヤジがスキーのノルディック競技の選手だったので、物心のついた頃から父親の肩車で雪の上を滑ったりしていたんです。だから自分でスキーを始める前に、

すでにプロの選手が雪の上を滑るときのスピード感などを身につけたように思います。

それと同時に、冬山の厳しい吹雪とか、それが頬に突き刺さるときの痛みみたいなものを学びました。でも、それが「辛さ」として体験されるのではなく、そこに「快感」があることも知りました。

子供時代に、そういう「自然」を楽しむという感覚が身についたから、アマゾンの森の中で、原住民たちと暮らすような体験にもすんなりなじむことができたように思います。



【福島】 結局、何が人間が一番ワクワクさせるかという、それは「冒険」なんですね。私たちが小さい頃に一番熱中したのは、洞窟の探検なんですよ。みんなでヒモで身体を結んで、恐る恐る洞窟の中に入って行くわけですが、コウモリの大群に接して怯えたり、出口を見つけれなくて不安に駆られたり…。

でも、そのワクワク感というのは、生涯忘れられない記憶として残るんですね。

そこで感じた「怖さ」が原点にあるから、大人になって、野山や川原でテントを張るとき

も、「ここは鉄砲水が出ないだろうか」、「落石がないだろうか」などという警戒心を持つようになったんですね。まさに「冒険」が人間の「予知能力」を高めるということを身を持って体験したように思います。

【坂田】 そう考えると、現代の都市生活になじんできた子供たちというのはかわいそうですね。体験があっても、それは自分の身体が学んだ体験ではなく、あくまでもテレビやゲームといった二次体験でしかない。だから、応用力が効かない。

最近の若い人たちのなかには、街の中を歩いているときに他人の動きをうまくかわせない人がいます。

それは、平らに均されたコンクリートの上しか歩いていないことが原因だという気がするんですね。自然の中を歩いていけば、まず同じ地面が続くことはあり得ない。砂利道もあれば、草地もある。さらに高低差もある。そのような地面の変化を感じながら歩くことによって、身体の重量バランスを取る“センサー”が養われるんですね。

また、落ち葉の上を歩いたりすれば、踏みしめるときに足裏に伝わる柔らかさとか、サクサクと心地よく響く足音などが脳内情報として蓄積されます。そういうことの繰り返しから、「大地の神秘」に思いを馳せる気持ちも生まれてくると思うんです。

それは、文学を読んだり、絵画を鑑賞したりするのと同じことで、自然が理解できるようになれば、芸術も理解できるようになる。両者とも「美」を感じる心を養うわけですから。

【福島】 基本的に、人間が「何かを学ぶ」ということは、マニュアル化されていないものから「学ぶ」ということだと思うんです。たとえば、自然素材を探して自分でおもちゃを作るとするじゃないですか。木の枝を切りとって、

ナイフで刻んで舟とか人形を作ったりするとき、自然の中に転がっている木の形なんかすべて違いますよね。生木なのか乾燥した木なのかによっても、ナイフを入れたときの手応えが違う。自然はマニュアルどおりに出来ていない。まずそこを知ることが大事ですね。

【坂田】 そのとおりですね。僕は、人間の「心」というのは「感性の集合体」だと思っています。感性というのは、見る、触る、聞く、嗅ぐ…要するに五感のバランスの上で成り立つものですよ。



ところが、都会では全ての感性が過度に刺激されてしまうため、逆に五感が麻痺してしまいます。だから心と肉体のバランスが取れず、ノーマルな感性が育たないのではないのでしょうか。

現代人は物質的な利便性が高まることを「文明の進化」として捉えがちですが、そういう考え方は、むしろ人間の身体能力や発想力を衰えさせるように思います。不便さに基づく当たったときに、それを自分の身体と頭脳を使って克服していくことが大事なんですね。



キャンピングカーは自然との親和性が高い

【福島】 人間の基礎的な能力というのは、生まれた頃から中学生ぐらいまでにできあがると思うんですね。その年齢までにキャンプをすることがどんなに大事かということアピールすることは必要でしょうね。

【坂田】 そうなんです。小さな頃に自然に親しんだ経験がないと、「食べること」の意味も分からないと思いますね。

たとえば、食事の前に「いただきます」と唱えますが、そもそもそれは「命をいただく」という意味なんですね。人間が食べて生きていくということは、「他の生命」をもらうということなんです。その命の大切さが分かってくると、無意味な飽食や、食べ残しを前提とした食材の無駄づかいなどできなくなるはずなんです。

ところが、今の都市生活者は、肉も魚も切り身でしか見たことがない。その食材がどのように生きており、どのように解体されるかというプロセスを知らない。だから命の重みに対する実感が無い。

それに対し、川で魚を釣って自分でさばいたり、食べられる野草を摘んだりしていると、「生き物の命をもらっている」という感覚が身についてきますから、日常生活においても、食事ができることのありがたさが分かってくるはずなんです。

【福島】 昔の話ですけど、隣の家がヤギを飼っていたんですよ。そのヤギが子供を産むと、その家ではヤギを漬して、家族で肉を食べていましたね。私たちの家でも、鶏が卵を産まなくなったら、羽根をむいてさばいて食べました。

今の都会の家族はそんな現場を知らないでしょうから、その場に居合わせたら「残酷だ」と目をそむけるかもしれませんが、逆にいうと、生活の中から「残酷さ」が消えたから、今の都会人たちは、無意識のうちに他人に対して「残酷に振る舞っている」ことに気づかないのかもしれないですね。

【坂田】 僕はアマゾンの密林で、長いときは半年あまり原住民と暮らしていたんですね。彼らは、鳥でも、魚でも、トカゲでも、サルでも、動くものはみんな捕らえて食べます。僕も彼らと一緒に狩に出て、つかまえた動物を食べましたが、彼らは「肉の匂」というものをよく知っているんですよ。暑い季節は、動物も痩せているし、お腹に虫も湧いているので食べない。冬になると虫もいなくなり、動物にも脂肪がついてくるので、おいしいとかね。そういう食材の“匂”に敏感になることが、食物に関するアンテナ感度を高める一番の方法ですよ。

【福島】 確かに都会にいと、季節感をとらえる“センサー”が鈍りますね。それでも、まだ日本は恵まれた国で、1年を通じてそれほど四季がはっきりしている国は、世界でも珍しいと思うんですね。

同じ土地でも、季節によって、気候も景色も食材も変わる。さらに同じ季節であっても南北では異なる。北海道の冬には流氷がやってきますが、同じ頃に沖縄ではダイバーが海に潜って珊瑚礁を観察したりしている。「観光資源」として捉えたと、こんなに味わい深い国はほかにはない。だから、こ



うい国を旅しない手はないと思うんですよ。

もちろん、旅のスタイルとしてはさまざまな方法が考えられますが、その土地土地を丹念に味わいながら移動していくとなると、やはりキャンピングカーの旅がベストではないかと思うんですね。

【坂田】 確かに、最近は登山道の駐車場などでもキャンピングカーの姿を見かけるようになりましたね。そこをベース基地のように使って軽登山やトレッキングを楽しんでいる。

そういった意味で、キャンピングカーというのはきわめて「自然」との親和性の高い乗り物のように思いますね。だから、子育て世代のファミリーが子供を連れてキャンピングカー旅行をすることは、子供を自然に親しませるチャンスになると思います。

【福島】 私の場合は、子供が産まれる前からキャンピングカーで遊んでいましたから、いざ子供を遊ばせるとなれば、もうキャンピングカーで旅行に行くぐらいしか思い浮かばなかったんですよ(笑)。

で、子供が小さいときから、川に行けば一緒に魚を捕る。山にいけば、ツルを探し出して山芋を掘る。海に行けばその漁師さんに許可をもらって、サザエを2〜3個採らせてもらったりね。

そのような天然素材を手に入れて、キャンプ地で調理して、家族で食べる。そうすると、それだけで家にいるときよりも「家族の話題」が豊富になっているんですよ。つまり、家族みんなが共同して食材を確保したり、一緒に調理したりすると、そこに一体感が生まれるんですね。「家族の絆」というのは、共同作業を経験することによって生まれるように思います。

【坂田】 僕も同様に感じます。キャンプというのは、物の利便性に頼らない生活にトライするものだと思っています。それこそ、狩猟採集生活をしていた時代の「人間の原風景」をかいま見るようなものなんです。



だから、参加者全員の共同作業が不可欠です。薪を集める係り、水を汲みにいく係り、食材を調達する係り、火を熾す係り…それぞれの役割のコンビネーションの上に成り立つものなんです。それがあからこそ、参加した子供ははじめて「ボクのやったことがみんなのためになった」という実感を手に入れることができるんですね。

子供というのは、だいたい3歳ぐらいから、放っておいても自分で面白いものを発見して遊び始めます。そのとき、他人のマネから入っていくんですね。そのなかでも子供が最初にマネるのは親なんです。特に自然の中でキャンプをしていると、都会の日常生活で使っている物が周りにほとんどありませんから、子供はストレートに親のやることに注目します。焚き火をすれば、すぐ一緒に火を熾したがる。

だから、自然の中に入ったときは、親は童心を取り戻し、自分が得意なことや、自分が最もやりたいことを始めればいいんですね。



ストレス社会を乗り切るための キャンピングカー旅行

【福島】 現代社会では、「家族の団らん」が失われつつあるという話をよく耳にしますが、長引く不況と核家族化の進行によって、それはどうしようもないことなんですね。

リストラを進めた企業が多いので、会社に残った人たちの仕事量が増える。家計を助けるために、お母さんはパートに出る。競争社会の波に乗り遅れないようにと子供は小さいうちから進学塾に通わされる。だから、夕御飯を家族で一緒に食べる時間が取れない。お互いのコミュニケーションがないから、ちょっと何か注意しただけでも、それが致命的な心の行き違いに発展する。

【坂田】 家族全員がストレス社会の波をかぶっているわけですね。余裕があればイラつかないようなことでも、ストレスが溜まるとちょっとしたことでイラつきますものね。今の時代、親も子供もストレスの固まりになっているから、ちょっとしたことで親子の仲たがいが生まれる。

僕は、今の育児放棄をする母親とか、子供に暴力をふるう父親とか、兄弟同士で殺し合ったりする子供というのは、すべてストレス社会に原因が求められると思っているんです。

この問題は、もう不況だとか、景気低迷といったようなことだけでは説明がつかない。要するに、高度にデジタル化された現代文明のスピードに、人間の生理が追いつけなくなったわけです。つまり、これまでの経済至上主義や物質万能主義は「幻想」に過ぎなかったということを教えているんです。

だから人間は、ときどき、のんびりした気分を取り戻せる世界に戻って「息抜き」をしなければならないと思うんですよ。

そのためには、ちょっとした時間でもいいから家族全員がストレスから逃れることのできる「家族イベント」が必要になってくるんですね。その一つが家族そろってのキャンプであり、そのきっかけとして、キャンピングカー旅行もあると思います。

【福島】 キャンピングカーの室内空間というのは、家族がお互いに顔を見合わせて団らんが保てるちょうどいい空間なんです。

最近は少子化が進んでいるので、どこの家でも、個室を与えられる子供が増えています。食事が終わると、もう子供たちは個室にこもり自分専用のテレビを見たり、ゲームをしたりして親との接触を断ってしまう。しかしキャンピングカーでは、否が応でも家族が顔を合わせる空間ができますから、そこに会話が生まれ、心の交流が生まれ、家族の絆が生まれるんですね。

そして、車内で食事を終えてから外に出て、家族全員で星など眺めたらサイコーじゃないですか。

日本だって、ちょっと都会を離れれば、夜空を被い尽くさんばかりの星がきらめく場所がいっぱいあります。小さな天体望遠鏡でいいから、それを持って行って土星を眺めると、土星の輪が本当に見えるんですね。それだけでも子供は大喜びですよ。

【坂田】 本当ですね。特に冬場に標高の高いところに行くと、「夜空」に対する概念が変わりますね。「夜空が暗い」というのはウソウソ! という感じ(笑)。あまりにもたくさんの星が見渡せるので、空全体が白く輝いて

しまうんですね。きつと、はじめて見た子はカルチャーショック……じゃないネイチャーショックを受けますよ(笑)。都会のネオンに囲まれていると絶対に見えない世界ですから。

だから、周りにモノがないことによって、はじめて見えてくる世界があるんだ……ということを多くの人に分かってほしいですね。

【福島】 確かに、文明の「明るさ」に頼らない生活って、何かを大切なものを教えてくれますね。最近キャンプ場などでも、焚き火台を使った「焚き火」が流行っていますけれど、それなども、現代文明の照明とは違う「明るさ」だとか「温かさ」を求める気持ちが表れているように感じます。

【坂田】 焚き火の「火」が蒸気機関にまで発展し、物質万能主義の発端となる産業革命をもたらしたという皮肉には感慨深いものがあります。つまり何事も「過ぎたるは及ばざるがごとし」。バランスが大事なんでしょう。

焚き火を囲むことで強まる人と 人との絆

【坂田】 焚き火というのは不思議なもので、焚き火を囲んでいると、普段はしゃべれないような話も自然と話し合えるようになってくるんですね。やっぱり、人類が最初に手に入れた「文明」なんじゃないかな。

人類は、火を確保し、それをコントロールすることによって、はじめて野生動物の恐怖などから逃れることができたわけですね。そのとき人間は「温かさ」や「明るさ」と同時に、はじめて「安全」、「安心」などという概念を手に入れたのかもしれない。だから、焚き火には人間同士の緊張を解いて、お互いにホッとさ

せる力があるんですね。

だから、逆に何にもしゃべらなくてもいいんです。普段、われわれは何かを話していないと気まずい気分が襲われますよね。しかし、不思議なことに、焚き火を囲んでいると、「沈黙」もまた心地良いんです。炎を見つめながら、同じ空間を共有しているだけで、言葉では表現できない気持ちを伝え合っていることが分かるんですね。そういう「豊かな沈黙」が、案外、家族のコミュニケーションを深めることになるのかもしれない。

【福島】 いやあその通りですね。たとえ一人でキャンプをしても、焚き火があると退屈しませんものね。薪をくべて炎を調節しながら一人で一杯やっている、日頃考えもしなかったようなアイデアが浮かんで来たりします。焚き火は、人間に「自己対話」を迫る力もあるのかもしれないね。

【坂田】 子供たちを引き連れてキャンプをやっていたときに、ある子がたまたま双眼鏡で焚き火の中を覗いたんですよ。そしてびっくりしたんですね。「自分が火の中にいるみたいだ!」というんですよ。それからみんなで次々と双眼鏡で焚き火を覗いて、みんな感動しているんですね。それはきつと、テクノロジーを駆使したテレビゲームのバーチャル世界をも凌駕する光景だったんじゃないかな。

自然の中には、どんな映像文明よりも人間を感動させるビジュアルが潜んでいるはずなんです。われわれがそれを見つめる目を曇らせているだけなのかもしれません。

【福島】 今の双眼鏡の話じゃないですけど、子供というのは本当に「遊び」の発見者ですね。われわれ親の方が、既成概念に束縛されて、新しい遊びを発見できないのに比べ、子供たちは自然の中に放り出してあげれば勝

手に自分たちで遊びを見つけ出します。

昔、キャンピングカー旅行中に、あるキャンプ場で大雪の中に閉じこめられたことがあったんです。そういうとき、うちの子供たちは、ヨソの子供たちと一緒にあって、教えもしないのにカマクラを作ってみたり、雪を踏み固めて雪山を作ってみたり…。次から次へと「雪遊び」を開拓していくんですね。

【坂田】 だから、アウトドアに子供を連れ出したら、もうあまり親はあれこれ指導しなくてもいいのかもしれないね。僕は年間10組ぐらいずつ、いろいろな親子をキャンプデビューさせているんですが、たいていの親は、「こんなに子供に手がかからない時間を持てるのは驚きだ」というんですよ。

つまり都会にいと世話のかかる子供でも、キャンプに連れ出すと、どの子も花を見たり、虫を触ったり、木ノ実をとったり、木に登ったり、さまざまな遊びを勝手に始めるんです。だから親はそれを黙って見守るだけでいい。そして、危険かどうかだけを見極めてあ

げればいいんですね。

【福島】 そうですね。むしろ、親の方が「遊び」に対する既成概念にとらわれていて口うるさく指導しがちになりますが、子供が発見する遊びに、正直、親は勝てないことがあります。

【坂田】 「自然こそ、子供の良き指導者」ということなんじゃないかな。結局、今度は親がその子供たちから教えられる番が来るわけです。だから親は、キャンプの後にゴミをしっかりと始末するとか、そういうルールとマナーだけを教えてあげればいいんじゃないかな。

【福島】 そのとおりです。「親子の絆」というのは、ただ親子がベタベタ仲良くやっていたらいいということではないわけです。社会人としてのルールとマナーを親子が共有することによって、「親子の絆」が強く結ばれるようになるんです。キャンピングカー旅行というのは、まさにマナーとルールを守ること成り立つ旅行ですからね。

